68

慶應義塾出身名流列傳に見られた済生学舎長谷川泰と泰に纏わる幾らかの書簡

志村　俊郎[1)]，都倉　武之[2)]，西澤　直子[2)]，唐沢　信安[1)]
山本　　鼎[1)]，殿﨑　正明[1)]

[1)]日本医科大学 医史学研究会，[2)]慶應義塾福澤研究センター

明治期の私立医学校には，済衆舎，済生学舎，慶應義塾医学所，成医会講習所，および東京女医学校が見られた．慶応義塾医学所は，明治6年福沢諭吉と松山棟庵により設けられた．教育は，英米医学が特徴であった．済生学舎は，明治9年創立で，教育はドイツ医学であった．これらの医学的背景から明治36と38年にまた故人の部でも慶應義塾塾員名簿に済生学舎長谷川泰が，特撰塾員として掲載されている．以下，慶應義塾出身名流列傳に見られた長谷川泰と泰に関する慶應義塾関係者の書簡から，長谷川泰の新たな人となりを述べる．慶應義塾出身名流列傳には「當局者の大学制度を許可せざるを怒りて一夜の中に廃絶せしめたる長谷川流に出でたる迄なり」とあり，泰が，衛生局長職を辞任，医師会法案，医学教育統一論及び専門学校令等済生学舎の学内・外で孤立無援が見て取れる．次に，福澤諭吉書簡集によると，相馬事件における明治17年馬場辰猪宛（書簡番号873）では，「昨日松山氏面会，長谷川泰氏の事を承合候処，松山氏も能く存居候，且長谷川は極めてヲネストに働き候よしに存候」とあり，福澤諭吉は，長谷川泰との親交および人間的にも評価していることが窺える．また伝染病研究所反対運動の渦中における明治26年北里柴三郎宛（書簡番号1781）では，「唯今松山氏来り，昨夜長谷川へハ面会不致，云々」と記載されており，住民の設立反対運動で，北里柴三郎が伝染病研究所長の辞表を試筆に至った経過を詳述の書簡であり，ここでも北里柴三郎が，この窮地の時，長谷川泰と面会したがっていたほど信頼していたことが，窺える．次に，福澤諭吉の全面支援で設立された伝染病研究所における長谷川泰の関与について述べる．長谷川泰は，明治26年に衆議員の折大日本私立衛生会伝染病研究所補助ニ付建議を提出し満場一致で可決されている．更に長谷川泰は，新伝染病研究所に住民からの猛烈な反対運動に対して，大日本私立衛生会臨時総会において「傳染病研究所ハ市内に置クモ妨ケナシ」の5時間にもわたる大演説をしている．

また北里柴三郎は，長谷川泰に対しての明治26年1月11日の書簡において「文部省所轄ノ傳染病研究所ニ入リ業務ヲ執ルコトハ到底出来不云々」と本心を吐露している．その他，長谷川泰が松山棟庵にあてた書簡には，年代不詳であるが「大日本私立衛生会副会頭の長与専斎と塾生でもあった元特命全権公使で衆議院議員の渡邊洪基は傳染病研究所芝區設立に反対である．」と記しており伝染病反対運動のさなかの手紙と思われ，長谷川泰が，反対運動の動きをいち早く松山棟庵に報告したものと思われる．

以上，慶應義塾出身名流列傳の長谷川泰と泰に纏わる幾らかの書簡から長谷川泰の新たな人となりを報告する．